

# 未明童話教材論研究

はじめに研究の動機と目的

私と未明童話との出会いは、幼い頃に両親が買い与えてくれた一冊の絵本によってである。そこには「赤いろうそくと人魚」をはじめとする数編の短編が収められていた。なにぶん幼い頃のことなので話の筋の細かな部分などは忘れてしまっていたが、本の挿し絵の暗く不気味な海や寂しげな人魚の姿だけは、いつまでも頭のかたすみに残っていて離れなかった。

大学一年の冬、ある雑誌の書評欄に新潮文庫の「小川未明童話集」が紹介されていたことがきっかけで、「幼いころの印象が今も頭から離れない（正確に言えば挿し絵の印象が強く残っているのであるが）小川未明の童話」に興味を持ち、文庫を購入した。十数年ぶりに未明童話を読んだ感想は「童話を即子ども向けの読み物としてとらえることはまちがいである」というものだった。未明童話の持つ大きな特徴である象徴的表現の中に込められた憧れや悲しみ、善意と悪意といったものの読み取り

は、子どもよりも大人のほうが容易であると思われたからである。この点から考えられる未明童話の理想的な読み方とは、子どもの頃に純粹に話のおもしろさを味わいながら一度読み、大人になってからもう一度、今度は象徴的な表現に込められた意味を考えながら読む、というものである。

読書離れが進んでいる現代の子供たちにとって、文学的経験をjする上で最も大きな役割を果たすのが国語の教科書であると私は考える。その国語の教科書に未明童話ほどのくらい採用されているのだろうかと思ひ、調べてみた。するとその時点（平成三年冬）で未明童話を採用しているのは光村図書発行の国語教科書六上「創造」（石森延男他著一九八五年）一冊だけ（「野ばら」を採用）であった。「日本児童文学の父」と称される未明の童話がこれほどまでに少ないのは、象徴性の読み取りが児童には難しい、百年近くも前の作品で文体も古く内容も現代の時勢に合わない、などのさまざまな理由から教材としての価値がないと判断されたためであろう。しかし、

越野 智夫

教材としての価値がないからといって、それが即文学として価値がないということにはならない。子供たちの貴重な文学経験の中に加えるのに十分な魅力が未明童話を持っていないと私は思う。そこで多くの未明童話の中から代表作といわれ教科書教材にも採用された「野ばら」を選び、教材研究を一念に行い、現代の子どもたちの学習に役立つ教育的価値を発見して、日本児童文学の古典ともいふべき未明童話の現代における存在意義を考察しようというのが、この研究の動機と目的である。

## 1. 教材研究法の標準化

実際に教材研究に入る前に、瀬川栄志編著「国語科教材研究の標準化 1 実践のための基礎理論」(明治図書 一九七一年)の第一章「教材研究の新しい視点」のなかのつぎの叙述を見ていただきたい。

(中略)「もっと能率的で最低これだけはおさえないければならないという授業の流し方はないか」と質問される。そのときわたしは、基本になる学習指導過程を示す。もちろんその学習指導過程の型は、一応それに従って行っても、いずればその型から出て、その人ならではできない味わいのある流し方を生み出すように助言する。結果的には暗中模索型で

終始する人より、基本的型に従って授業研究した人のほうが早く指導法が身につく、授業も充実するのである。「型に入らな型を出る」ことによる能率化である。このことからわかるように、教材研究にも一つの定型・標準があったほうが、能率的ではなからうかと思ふのである。

(二〇ページL二〇～二二ページL七)

この考えを実践するために瀬川氏は「教材研究で基本的に研究すべき事項は何か。それをどのような過程で研究していったらよいかの標準化」(二五ページL四～五)を全二七項目にまとめている。(第二章「教材研究の基本事項の設定と研究過程の標準化」二五ページL六～二七ページL一)それはこの二七項目を逐次研究していくことによって、落としはならない研究事項を着実に研究することができ、教材の層的な理解が可能となり全二七項目を研究し終えた段階で何をどう教えるかという指導の見通しが自然につくというものである。

教育実習以外に教材研究を実践する機会がなく、教材研究の基本的な手法すら身につけていなかった私は、「野ばら」を教材研究するにあたり参考になる教材研究の原則・定型をさがしていた。その時出会ったのが瀬川氏の著書とそこにある標準化された教材研究の原則・定型である。この二七項目にしたがって順次教材研究を進

めれば初心者でも合理的に研究を進めることができる。この点でこの方法はすぐれていると言えよう。しかしこの方法を「教材研究」と呼ぶのには問題がある。それはこの方法が「教材研究的要素」と「作品研究的要素」と「指導法研究的要素」の混在したものだからである。この三要素が混在していると、それぞれの研究法の持つ性格が不鮮明になる恐れがある。そこでこの問題を解決するため、二七項目の教材研究の定型の中でも特に教材研究的要素にあたる部分を参考にして独自に教材研究の基本事項と研究過程の標準化を試みたものを以下に示す。

### 「教材研究の基本事項と研究過程の標準化」

#### 1. 内容価値探求の過程

##### ① 教材の持つ価値の発見

ア 教材としての作品が持つ価値を発見する。

イ 教材の持つ価値が学習者の人間形成・精神発達に役立つ可能性を探る。

##### ② 意味構造を明確にする

ア 叙述に対する学習者の反応を予想する。

イ 意味構造図を作成し、板書事項の研究に役立つ。

##### ③ 価値目標を決定する

ア 指導書に位置づけられた「話題や題材選定

の観点」との照合を行う。

イ 価値目標を文章化する。

#### 2. 技能の発見と精選の過程

##### ① 教材の持つ技能を発見する

ア 教材の持つ技能養成要素を発見する。

イ 中心技能と関連技能との弁別および両者の関連の考察を行い、指導の方向性を探る。

##### ② 文章構造と指導事項を把握する

ア 教材の文段・段落や場面の数および中心語句・中心文をとらえるとともに、言語形式（表現上の特質、用字、用語）を明らかにする。

イ 文章構造図を作成し、指導事項を発見・精選する。

##### ③ 技能目標を決定する

ア 指導書に位置づけられた「各学年の目標および内容」との照合を行う。

イ 技能目標を実際に文章化する。

では以下に、この標準化された教材研究法に従って行った教材「野ばら」の教材研究結果を示す。研究に用いる教材は光村図書出版発行「国語六上 創造」（石森延男他著 一九八五年）に収められているものとす。したがって研究結果の中のページ番号や行番号は同教科書

のそれに準ずる。なお紙幅の関係上研究結果をすべて掲載することはできないため、特に重要と思われる部分を抜粋して掲載することとする。

## 2. 「野ばら」の教材研究

### 1 内容価値探求の過程

#### ①教材の持つ価値の発見

ア 教材としての作品が持つ価値を発見する。

○「野ばら」には抽象的・象徴的表現が多く用いられているため、この作品を読み深めていくには、行間を読む、想像を深めて読む、といった読み手自身の作品に対するイメージの創造が必要となる。そこから「野ばら」の学習を通じての思考力・想像力の育成が期待され、ひいてはそれが言語を通しての豊かな心の育成にもつながる。

○「野ばら」は戦争に材を求め、そのような極限状態のなかでも友情を失うことのなかった老人の兵士と青年の兵士の深い心の結びつきと、青年の死による悲劇的な別れとを抽象的・象徴的表現と朗読調の文末表現を用いて描いている。この表現技法を用いることで「野ばら」は、児童の心に静かに友情の素晴らしさとそれを無常に引き裂く戦争の恐ろしさをうたえていくだろう。これがきっかけとなって「正しい人間の生き方

」「正しい社会のあり方」に児童が思いをはせるようになることが期待される。

#### イ 教材の持つ価値が学習者の人間形成・精神発

達に役立つ可能性を探る。

○人間どうしの信頼関係や愛情を育てる友情の素晴らしさと、戦争の恐ろしさ・無情さが理解でき、理想の社会や人間のあり方を考えることができるようになる。○抽象的・象徴的な表現を思考力・想像力を動かさながら読むことで、言語を通しての豊かな心の育成を行う。

#### ②意味構造を明確にする

ア 叙述に対する学習者の反応を予想する。

叙述に対する学習者の心理的反応を具体的に予想することで、どの叙述にどんな教育的意図（価値内容）が込められているかを明らかにし、各場面における価値を具体的に把握する過程である。ここでは野ばらが枯れる場面の研究結果を示す。（図1参照）

イ 意味構造図を作成し、板書事項の研究に役立つ。

直前の過程で明らかになった各場面ごとの価値内容を叙述に即して実際に図式化し、板書事項研究に生かす過程である。ここでは物語の結末部分の意味構造図を示す。

(図2 参照)

④ 価値目標を決定する

ア 指導書に位置づけられた「話題や題材選定の観点」との照合を行う。

『小学校指導書 国語編』（平成元年六月 文部省）

第四章「指導計画の作成と内容のとりあつかい」の「3 教材における話題や題材選定の観点」（二二六〜二二七ページ）と「野ばら」の持つ価値との関連を見ると、この「野ばら」は、

- ② 思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと
- ③ 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。
- ④ 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。

⑦ 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。

の四項目と関連が深い。② は「思考力や想像力及び言語感覚を養う」という部分が、「野ばら」の抽象的・象徴的表現にかくされた意味の読み取りの際に思考力・想像力の育成が期待される、という点と、⑤および⑥はこの作品の主題である「国や年齢の違いを越えて結ばれた

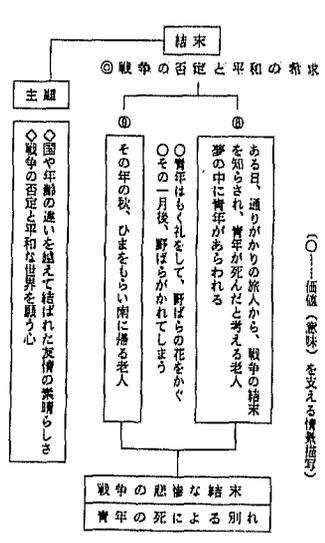
(図1)

【文章の展開】  
○それから一月ばかり……、野ばらがかれ  
てしまいました。

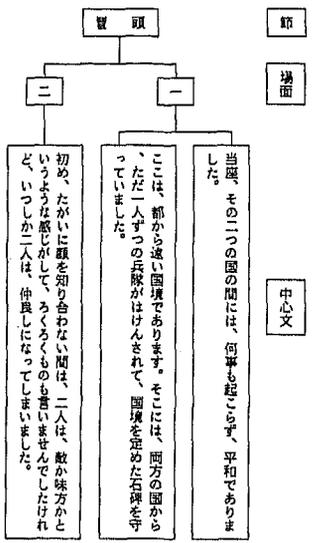
【学習者の反応】  
●二人の表情に満ちた生活を見つめてきた野ばらが残ってしまっ。二人の深しく平和な生活が終わってしまった。二人のことを野ばらが告げているのかも知れない。  
二人の心のつながり（「友情」）が切れたことを表しているのではないか。

(図2)

○……価値（意味）を定める情景描写



(図3)



友情の素晴らしさ」「戦争の否定と平和な世界を願う心」を読み取ることで理想的な人間同士の関係や正しい社会のあり方に思いをめぐらすことが期待される点と、(7)は国境付近の風景や野ばらの咲き乱れる様子を想像しながら作品を読み味わうという点と、それぞれ関連が深い従って、以上四項目の観点と関連を持つ「野ばら」は教材として取り上げることが可能であると判断される。

#### イ 価値目標を文章化する。

前過程までに探ってきた教材の持つ価値を、学習指導案の指導目標のうちの価値目標に当たる部分を書く際に参考にできるように、教材内容に即して具体的に文章化する。

○老人と青年の心の交流を通して、人間同士の信頼関係や愛情を育てる友情の素晴らしさがわかる。

○老人と青年の友情を無情に引き裂き、青年を死に至らしめた戦争の恐ろしさ・むなしさを理解し、平和の素晴らしさ・とおとさを実感できる。

○敵味方の間柄となっても互いに思いやる心を忘れなかった老人と青年の姿から、正しい人間関係や社会のあり方に思いをはせることができる。

#### 2 技能の発見と精選の過程

##### ①教材の持つ技能を発見する

ア 教材の持つ技能養成要素を発見する。

どんな国語の技能がこの教材で養成できるか、さまざまな可能性を広く探る過程である。この教材で養成できる技能のうち、特に重要と思われるものは次の二点である。

○抽象的・象徴的表現に込められた作者の意図を読み取ることができる。

○登場人物の心情およびその変化を叙述に即して読み取ることができる。

イ 中心技能と関連技能との弁別および両者の関連の考察を行い、指導の方向性を探る。

直前の過程で発見した教材の持つ技能養成要素のうち特に中心となる技能を精選するとともに、残りの技能養成要素のなかから中心技能と関連する技能を発見し、両者のかかわりあいを調べ、指導の方向性を探る過程である。

● 中心技能…… 抽象的・象徴的表現に込められた作者の意図を読み取ること。

野ばらの持つ象徴性に気づき、主題に接近する。

● 関連技能…… 登場人物の心情およびその変化を

叙述に即して読み取ること。

物語の場面や情景を想像しながら読むこと。

老人と青年の心の通い合いを、「野ばら」の形象と結びつけながら叙述に即して深く読み取っていくことよって、「野ばら」の持つ象徴性に気づき、作者の意図するものや主題に接近することができる。従って、各場面ごとの状況や情景描写を注意深く読み取っていく態度が大切であり、指導の方向もそこに向かうことになると思われる。

## ② 文章構造と指導事項を把握する

- ア 教材の文段・段落や場面の数および中心語句
- ・ 中心文をとらえるとともに、言語形式（表現上の特質、用字、用語）を明らかにする。

「文章全体と文意との関係において、文・文段・段落数・センテンスの数を明らかにし、文章の組み立てを理解する作業」（同前三六ページ一二～一三）を行う過程である。ここでは冒頭部分の意味段落相互の関係と中心文を構造化したものを示す。（図3参照）

- イ 文章構造図を作成し、指導事項を発見・精選する。

中心文・語句・文体・用語と文章の展開が一目でわかる文章構造図を作成し、これをもとに、過程で発見した教材の持つ技能と関連させながら、指導すべき言語要

素（＝技能）を文章の構造・形式・表現の中から発見・精選する作業を行う過程である。（図4参照）

## ③ 技能目標を決定する

- ア 指導書に位置づけられた「各学年の目標および内容」との照合を行う。

『小学校学習指導書 国語編』（同前）「各学年の目標および内容」第六節「第六学年の目標と内容」（九二ページ～一〇七ページ）の「2 内容」中の「B 理解」九八～九九ページの十項目の指導事項と、「野ばら」の持つ指導事項との関連を見ると、この「野ばら」は、

- ウ 目的や文章の種類や形態などに応じて内容を眺み取ること。

- エ 文章の叙述に即して、細かい点にまで注意しながら内容を正確に読み取ること。

の二項目と関連が深い。ウは「野ばら」が抽象的・象徴的手法を多用した形態を持ち、また特徴ある文末表現を持つ作品であるという点から、エは「野ばら」が、老人と青年の心の通い合いを、野ばらの形象などの情景描写と結びつけながら、叙述に即して深く読み取るという指導事項を持つ点から、それぞれ関連が深い。

以上の点から「野ばら」の学習活動は内容の読み取り

(四)

【中心文・語句・文体・用語】

【文章の展開】

【技能・言語要素】

場面八	●「旅人は、小さな國が負けて、その國の兵士はみな殺しになって、戦争は終わったということを知りました。」	《クライマックスへの接近》
	●「そんなら、青年も死んだのではないかと願いました。」	《青年の死を暗示》
	●「うとうとと居ねむりをしました。」	
	●「大勢の人の来る気配がしました。見ると、一列の軍隊でありました。」	《帰って来た青年・物語のクライマックス》
	●「馬に乗ってそれを指揮するのは、かの青年でありました。」	《不気味さを表す》
	●「その軍隊は、きわめて静しく、くで、声一つ立てません。」	
	●「老人の前を通るときに、青年は、もく礼をして、ばらの花をかいだのであります。」	《象徴的表現》
	●「老人は何かものを言おうとする、目が覚めました。」	
	●「それは、全くゆめであったのです。」	《青年の死を決定づける》
	●「それからひと月ばかりしますと、野ばらが枯れてしまいました。」	《象徴的表現》
場面九	●「老人は、南のほうへひまをもらって帰りました。」	《物語の終結》

が主となるため、この教材の持つ技能は脱解技能と位置づけることができる。

イ 技能目標を実際に文章化する。

イの過程で発見・精選した指導事項のうち最も重要と思われるものを文章化する。これは学習指導案の指導目標のうちの技能目標に当たる部分を書く際に参考となる。ここではこの教材の中心技能「抽象的・象徴的表現に込められた作者の意図を読み取ること」の育成にかかわる場面八の技能目標を取り上げる。

○場面八 野ばらの象徴性に気づき、野ばらに象徴されるものを前場面までの野ばらの叙述と結びつけて読み取る。

以上全一二項目の研究を通して得られた教材「野ばら」の持つ教育的価値（意味的価値、技能的価値）は次のとおりである。

意味的価値……老人と青年の心の通い合いと別れを通して友情のすばらしさと平和のとおりと、戦争の恐ろしさがわかること

技能的価値……野ばらの形象に込められた象徴性を叙述に即して読み取ることができるよう

### 3. 教材「野ばら」の現代的価値

このような教育的価値を持つ「野ばら」を、現代の子供たちに教材として与える意義としては次のようなものが考えられる。まず意味的価値に關することだが、この教材の学習を通して、平和な生活に慣れきった子どもたちが戦争を身近に感じ、その恐ろしさ・悲しさに触れ、「戦争」「平和」の問題を考えるよい機会を与えることができる。さらにはそこから「正しい人間の生き方」とか「正しい社会のあり方」といったことにまで考えを深めさせることも期待されるのである。

次に技能的価値に關することとして、この作品が抽象的・象徴的表現を多用している点があげられる。抽象的・象徴的表現が多くなれば、文章の叙述から想像を深めて読む、行間を読む、といった創造性の高いイメージ豊かな読み手が読み手に要求されるようになる。この点が国語科教材として重要な言語能力（＝読解力、思考力、想像力）の育成に有効に機能するであろうし、また言語を通しての豊かな心の育成も大いに期待できるのである。

以上の点から「野ばら」は現代の子どもたちに教材として与えるにふさわしい価値を持った作品であるということが出来る。

付記 この論稿は、卒業論文をもとに執筆したものである。

（こののともお 伊那市立伊那北小学校教諭）